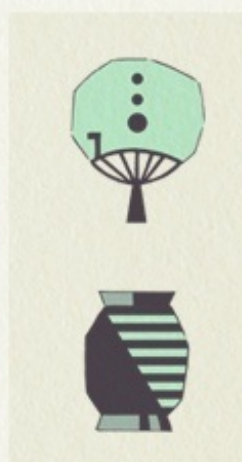


車 ten 云 糸 ketsu 吉

Twitter novels



novel
6key

.....

illust
ziboa

Twitter

140文字で「いま何してる?」を
呟くWebサービス。

Twtnovel

おもにハッシュタグ #twtnovel で投稿されている、
140文字（ハッシュタグの文字数を差し引けば132文字）で
一作品が完結している小説。

私の大好きな人たち

My Dears

幼い頃の事故が元で、妹は3人の人間しか記憶できない。内訳は僕と両親。

妹の16の誕生日に僕は言った。

好きな人が出来たら、僕を忘れてその人を心に刻め。

やだよ、と妹は笑った。

翌年のある日、恋人の男と共に現れた妹は泣きそうな顔で僕に言った。

「お兄ちゃん。あたし、誰？」



131letters

海と灰と血

Curse

「百まで生きれば呪いが解けるの」

祖母の言葉は痴呆によるものだと思っていた。

結局、百の齢を迎える直前に祖母は逝った。

火葬した遺灰に大腿骨はなく、

代わりに出てきたのは魚に似た大きな尾骨。

私は遺灰を故郷の海に撒いて願った。

私が還るそのときは、

せめて自らの意思と足でと。





うしろ

c r i m s o n

彼女からの着信は1ヶ月ぶりだった。

「今から帰るね」

僕は玄関の鍵をかけ、カーテンを閉めて布団を頭から被った。

ありえない、先月彼女の通夜に出席したのに。

扉を叩く音は朝まで続き、やがて止んだ。

諦めたのか？ 恐る恐る玄関に向かう。

真っ赤なパンプスが揃えて脱いであった。

最後まで 救ってくれ なかったね

for (i = 0; i < 6; ++i)



教室の窓の外を、長い黒髪の女生徒が落下していく。

これで六回目だ。

誰も騒がず痕跡も残らない、僕だけに見える幻。

だが不思議なことに、これまで髪に隠れて見えなかった彼女の顔が、今回ははっきり見えた。

柔らかな微笑み。

僕は恋に落ち、その一秒後、

鈍い音が初めて響き渡った。

130 letters

「もし私が寝たきりになっても、ずっと一緒にいてくれる？」

あのとき頷いたことを僕はずっと後悔していた。

あの日の誓いは現実になり、僕らを縛り付けている。

もういいだろ？

誓いを破る言葉は彼女に届くことはない。

ベッドの傍らで微笑む彼女を、

僕は唯一動く右目で見つめ返した。

約束

*If so...
I'll stay with you forever.*

彼女の好きなもの

a kitten tastes sweet

彼女が子猫を拾ってきた。

この前は犬だったよな。僕の不平に、

「だって好きなんだもん」と彼女が笑った。

元気に鳴く子猫を抱えて彼女が風呂場へ向かう。

僕はその背に声をかけた。

夕飯いらないよな？

「うん」

満面の笑みの口元に八重歯が覗いた。

子猫の鳴き声はじきに止んだ。





花火 浴衣 海岸線

Unforgettable

夜空の花火を一番喜んでくれた。

水底じゃよく見えなかったから、と彼女が目を輝かせる。

やがて暗い静寂が満ちると、

じゃあ行くね、と海へ向かっていった。

「いつかまた会える？」

僕の問いかけに困ったように微笑むと、

青い浴衣のような尾ひれを翻して、彼女は夜の波間に消えた。



お母さんと宇宙人

Good night, mom.

母がもし人間に化けた宇宙人だったら——

幼い頃の私はよくそんな妄想をして怖がった。

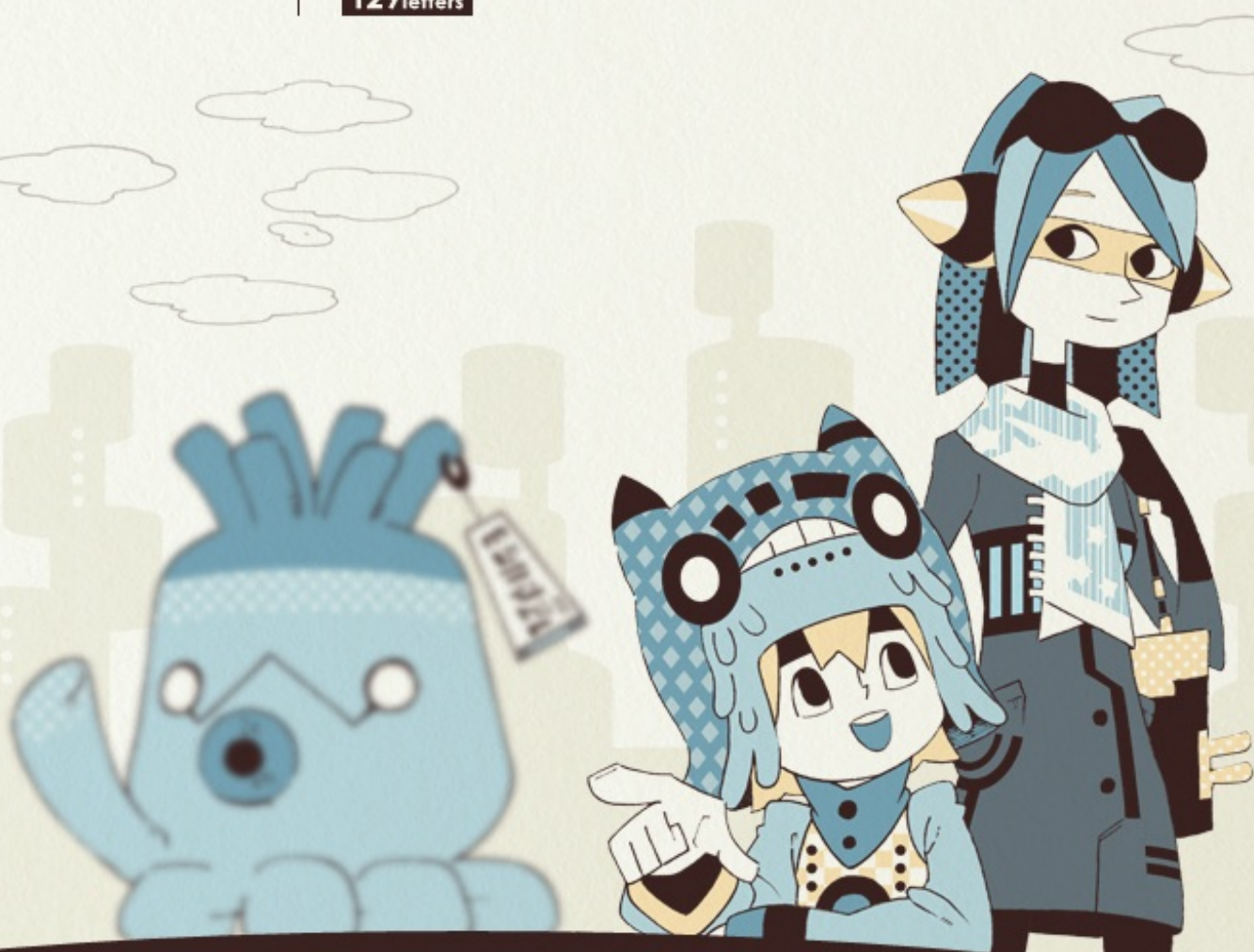
眠れぬ私に、母は枕元で子守唄を歌ってくれた。

こんな優しいお母さんなら宇宙人でもいい。

私のその言葉に、「何言ってるの」と母は優しく笑って、

私の頭の触角を優しく撫でてくれるのだった。

129 letters





ロキオ

6key

http://twitter.com/6th_key

千賀史貴

ziboa

<http://ziboabiboo.jp/>

車云糸吉【テンケツ】Twitter小説集

<http://p.booklog.jp/book/27005>

【第2弾 <http://p.booklog.jp/book/32169>】

著者：6key(ロキオ)&千賀史貴(ziboa)

6keyプロフィール：<http://p.booklog.jp/users/6key/profile>

千賀史貴(ziboa)【ziboabiboo】<http://ziboabiboo.jp/>

発行所：ブクログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27005>

ブクログのパプー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27005>